



Vol.18
September 2013

A r t & C u l t u r e



デザイン学部長

海野敏夫

Toshio Unno

建築と文化 —建築は「凍れる音楽」か?—

スコットランドの風景は夏でもどこか寂しい。ほとんど高木が見当たらない。草で覆われた丘陵が延々と目に入ってくるのみである。およそ人の気配がしない。稠密な日本からすれば別世界である。友人と交代で運転するベンツAクラスは、スペインを北上しネス湖に沿って南下した。目指すところはアイラ島である。同好の士はもうお気づきだろうが、スコッチウイスキーのディスティラリーをめぐる旅である。何故そこまでして寂寥感あふれるこの地を訪れたのか? そこには、この風土が生んだ奥深い味わいのスコッチシングルモルトがあるからである。

あらゆる酒は風土と密接に関係している。また、その地の人々の生活とも深く繋がっている。密造酒の取締りから逃れるために樽詰めのまま隠していたことにより、シングルモルトは熟成した。このように、ある種の負の行為を含めて酒は文化そのものである。そして、建築も風土と切っても切れないものの代表の一つであり、その地の風土・文化が結実した形態となって構築される。

建築は、何のために誰のためにという構築の目的・機能がはっきりしている。しかし、明確な目的・機能を論理的に分析しそれを統合すれば優れた建築になるかといえ、そうではない。人々や権力者の思い、時には神の思い（人々が考える）をその形態・空間に閉じ込める作業を伴う。そして、その思いは、全体の形と細部の納まりに直接的表現や比喩・暗喩として形作られる。その代表的な例が宗教建築であり、洋の東西を問わない。その建築は、技術の発達と呼応するかのように例外なく天高く伸びようとした。むしろ、上へ上へ伸びようとする人々の意思が、技術を発達させたといった方が正しい。ヨーロッパのゴシック教会、中東のモスク、アジアの幾重にも重なる塔。しかし、高さを競うこれらの建築は、空間の意味が異なっている。前二者は祈りの空間であるが、アジアの塔はストゥーパであり釈迦の供養塔である。ストゥーパは、民衆のための祈りの空間を内包していない。日本や中国では、機能別の伽

CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~3
公開講座紹介	4~5
活動紹介	6~7
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

藍を配置することで祈りの空間を付加しているが、エリートである僧侶のための空間であり、民衆は外から祈るのみである。

このような空間構造の違いは、他の分野に影響していく。第一に、構造力学的な違いに注目する。ゴシック教会とモスクの主たる素材は石であり東アジアの塔の主材は木である。ゴシック教会は石の圧力を分散するために先頭アーチと交差ボルトおよびフライング・バットレスを生み出した。数学的能力に優れたアラブ人は巨大なドームを実現した。中国では石と木の塔が混在しているが、文明の終着点の日本では、華麗ともいえる木造三重・五重・七重の塔となって結実した。地震や台風の襲来が頻繁な日本の風土に対して、職人たちは技術的にも素晴らしい仕組みを編み出した。現代の制振装置に匹敵する心柱がそれである。当初は多層の屋根荷重を支える親柱であったと思われるが、四国の普通寺五重塔の心柱は鎖で吊られており、6cmほど宙に浮いている。明らかに制振装置として特化した役割を果たしている。これらの多重塔は、地震によって倒壊したという記録がない。この神秘的ともいえる技術は、現代のコンピュータによる分析によって、スカイツリーの制振構造に応用されている。

第二は、内部空間と音楽の関係である。軽快なフレイム構造のゴシック建築は、教会を分厚い壁の重圧から解放し、ステンドグラスによる華麗な光が降り注ぐ空間へと変身させた。次に神の国の地上化に必要なものは、音楽である。多声楽による壮大なポリフォニーを大空間いっぱい響かせることによって、聖歌隊の声は清澄な神の空間を演出した。一方、神の威厳をしめすために、この空間を占める空気全体を震わせる装置として巨大なパイプオルガンが作られた。ここに、西ヨーロッパ音楽のすべてがある。

アーネスト・フェノロサが薬師寺東塔を「凍れる音楽」と言ったかどうか分らない。しかし、建築を表現するときによく用いられる言葉である。建築は静止した物体であるが、音楽は時間芸術といわれるように時の経過とともに表現される。優れた建築は、全体の構成・形態とディテールが呼応しあっている。全体と細部の構成は、あたかも1曲の音楽のようである。その意味において、建築を音楽と結びつけることは間違っていない。しかし、建築は動かないが人が動くことによって空間そのものが流動化する。人が空間を移動するに従って、内部は様々なシーンを展開する。この一連の空間変化を建築のシークエンスと表現し、建築家はいかにこの連続性を演出するかに思いを傾注する。つまり、建築は、空間は当然のことながら、時間内包していると言える。建築は、決して立ち止まってははいないのである。三島の金閣寺は、鳳凰の羽ばたきと共に夜の闇を航行するではないか。

学生デザインワークショップ (サウンドスタジオ2012)

宮田圭介 (デザイン学部メディア造形学科)

2013年3月に、浜松地域に立地する楽器メーカーと静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターとの産学連携企画による第1回学生デザインワークショップ「サウンドスタジオ2012」を開催しました。このワークショップは継続的に開催することを視野において、今回は試行としてヤマハ(株)の協力を得て、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、および本学の学生を募って行われました。デザイン活動を通じて、地域、企業、大学が連携し、教育・研究および地域の産業振興に貢献することを目的とし、地域発、日本発信としての文化や芸術につながるデザイン活動のあり方を探ることが開催の趣旨です。



ワークショップの様子

今回のワークショップのテーマは、『音と暮らす』としました。「『音』とは何でしょう。音は空気の振動であり、空気という媒質がない宇宙空間に音はありません。空気に包まれたこの地球は『音の星』と呼べるかもしれません。では『音と暮らす』とはどんなことでしょうか。音を聴いても空腹は満たされませんが、楽しい気分になったり、寂しくなったり、ときには心が満たされることがあります。目や口は閉ざすことができるのに、耳はいつでも開いていることから、何かの予兆として気づきを与えるきっかけになったり、また余韻として残ったり、場の雰囲気をつくったりするのが『音』なのかもしれません。『音による表現様式＝音楽』は時間の芸術と呼ばれます。また、日本では古くから虫の音や雨音を味わい、自然を愛でる文化がありました。今回のワークショップではそのような『音と人々の生活』を題材に、様々な角度からデザインの可能性を考えて頂きたいと思います。」 - ヤマハ(株)デザイン研究所・川田学所長によるテーマ解説より

愛知県立大学・柴崎幸次准教授、名古屋芸術大学・片岡祐司教授の協力を得て、3大学の学部2年生16名が参加しました。短期間の作業でしたので、模型やパネル、映像等の制作、および講評会用プレゼンテーション資料制作に活動を限定しました。



最終発表風景

3月5日(火)～3月7日(木)の3日間で、自由創造工房においてブレインストーミングと個人ワークによる中間発表を行いました。ここでは、柴崎先生、片岡先生、本学の峯郁郎教授、高山靖子准教授が主な指導にあたりました。初日はヤマハ・川田学デザイン研究所長、二日目もヤマハ・佐々木幸弥講師による特別講義を聴講したおかげで、学生達の『音』に対する視野が広がったようでした。その後は一旦母校に戻り、各自のアイデアや作品をブラッシュアップして、最終発表を3月28日(木)に西ギャラリーで行いました。プロダクト、メディア、空間デザインなど異なるデザイン分野を学ぶ学生が一堂に会し、ワークショップを通じて感性を高め合い、社会的課題に対して具体的な提案をまとめ、その将来像を描くというすばらしい発表になっておりました。また、ヤマハ(株)の研究者・デザイナーとの交流や、講評会、発表会における真剣な議論は、参加学生にとって貴重な財産になると思われました。次回のワークショップでは、浜松地域における楽器メーカーの連合組織である静岡県楽器製造協会との産学連携として活動範囲を拡大することにより、デザイン分野における静岡からの発信力向上を目指していきます。

活動紹介

ユニバーサルデザイン絵本コンクールの3年間(2010~2012)

林 左和子 (文化政策学部文化政策学科)

1. 概要

ユニバーサルデザイン絵本コンクール(以下UD絵本コンクールと略す)は、2010年度に本学10周年記念事業の一環として開催したのが始まりである。この年は一般部門135点、高校生部門14点、子ども部門30点の応募があった。

2011年度に特別研究「ユニバーサルデザイン研究所の設立に関わる研究」(文化・芸術センター長特別研究)の一環として開催するにあたり、一般部門にかわり大学生部門を設けた。

前年の応募者の中に、作品製作のためにユニバーサルデザインを勉強したという高校生がいたこともあり、コンクールをユニバーサルデザイン教育に資することを目的とした結果である。この年の応募作品は、大学生部門11点、高校生部門3点、子ども部門76点であった。大賞となった「ユニバーとバーサル」は、浜松市立蒲小学校のUDに関する総合学習から生まれた作品である。前年の応募作品を改良し、再度応募した高校生もいた。

2012年度には、「ユニバーサルデザイン研究賞」を新たに設けた。ユニバーサルデザインについての理解を重視する予定であったが、残念ながら、該当作品はなかった。また大賞の該当作品もなく、準大賞として、「きょうりゅうのいえ」(子ども部門)と「あけて、さわって」(高校生部門)を選出した。応募点数は、大学生部門9点、高校生部門18点、子ども部門36点であった。この中には、2010年度コンクールの応募者および同じ団体からの応募作品も含まれている。また展示会を道路に面したギャラリーで開催、期間中にテレビ、新聞でとりあげられたこともあり、8日間で258名の方の来場があった。

今年の応募締切は9月末日、展示会は11月9日~17日を予定している。

2. ユニバーサルデザイン絵本とは

本コンクールでは、UD絵本を「身体的・知的特性、年齢、そして文化などを越えて皆と一緒に楽しむことができる絵本、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた絵本」とした。形、構成、素材などは指定しないが、主として動画によって構成される作品(場面が1つずつ独立していない作品)は対象外としている。これは、「場面」展開があることが絵本であるための最低限の要件であろうとの考えによる。

「良い絵本はそれ自体がユニバーサルデザインであって、ことさらに「UD絵本」という必要はないのでは」という質問をうけることがある。確かに、年齢や文化的背景を越えて楽しむことのできる絵本は存在している。IBBY障害児図書資料センターも「Outstanding Books for Young People with Disabilities(読書に障害がある青少年のための推薦図書)」を、

特別なニーズのある子どもたちのために製作された図書、障害がある子どもを描いた一般児童書、一般市販絵本というカテゴリーにわけている。しかし、このようなプロジェクトが存在すること自体、まだ十分ではないことを示しているのではないだろうか。「世界のバリアフリー絵本展」実行委員長であり、2010年のUD絵本コンクール審査委員長でもあった攪上久子氏は以下のように書いている。

今ある絵本では、そこにバリアがあって、十分その楽しみを味わえない子どもたちが、日本にもたくさん居ます。その子どもたちの状態に寄り添って絵本に配慮を加えると、そのバリアがなくなったり小さくなったりします。「障害」の有無に関わらず、そのバリア(障害)を超えて楽しめる絵本をバリアフリー絵本と考えています。(中略)彼らには、様々な読書支援と、デザイン、言語、レイアウト、絵などがその子のニーズに合った しかも文学的にも、美術的にもよい要素を十分もった本が必要です¹⁾。

楽しむことのできる絵本の存在に気がつかない、というバリアもあるだろう。バリアフリー絵本、UD絵本という名称が、絵本を手にするきっかけになることもあると考える。なお、本コンクールでUD絵本の名称を用いているのは、一緒に楽しむことのできる絵本の存在により、様々な立場の人と人とが交流をはかる機会をつくることもできるのではないかという思いからである。

3. 課題

今後の課題として、本コンクールがめざすUD絵本とはどういったものかについての情報を発信していくことがある。このため昨年からUD絵本の製作ワークショップを始めた。まずユニバーサルデザインとは何かについて話した上で、すぐれたUD絵本を見せ、その後時間の許す限り、各自に製作してもらった。ワークショップを通して、UD絵本についての理解を深めてもらいたいと思っている。また、応募者それぞれに展示会期間中の反応もできるだけ伝えていきたいと考えている。

コンクール開催にあたって学内外の多くの方のご協力をいただきました。ご支援、ご協力をいただいた皆様にこの場を借りて御礼を申し上げます。

¹⁾ 攪上久子「ようこそバリアフリー絵本の世界へ」
http://www.bf-ehon.net/goaisatsu
最終確認日 2013年8月17日

インターカルチュラル?～国際文化学の構想と射程

馬場 孝 (文化政策学部国際文化学科)

「文化の接触と変容の現場^{フィールド}へ」と題した今年度前期の公開講座は、静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科編『国際文化学への第一歩』(すずさわ書店、2013年)をベースに、しかしその枠内に限定されることなく自由な内容で、という趣旨で企画された。折しも同じ時期、山口県立大学が似たような性格の書籍を出版している。内容も構成もよく工夫され、新しい時代の新しい学びのスタイルに学生を導こうという意欲にあふれたテキストである。以下はその冒頭の一節である。

国際文化学という領域が誕生し、**20年あまり**が経ちました。国際文化学は、文化と文化が交差する「とき、場所、機会」をとらえ、**文化間で起こる現象**をテーマに学際的なアプローチを行います。(山口県立大学国際文化学部編『星座としての国際文化学—みつけて、つなぐ、学びのスタイル』青山社、2013年、iv頁、強調馬場)

上の短い文章には、今回の私たちの公開講座を振り返るだけでなく、「国際文化学」の「原点」、「現在」そして「将来」を考えるうえで、実に多くの示唆が含まれているように思う。文中の3つのキーワードを順に取り上げ、その点を敷衍してみよう。

「**20年あまり**」。この数字が物語る国際文化学の出発は明白である。日本の大学が次々と「国際文化」なる学部、学科、研究科を設立したのが1990年代である。しかしその基盤に「国際文化学」の成熟があったのではなかった。背景にあったのは、旧教養部あるいは不人気学部の改組転換といった、組織的、非学問的事情であった。つまり、「器」が先にできて「中身」の模索と構築が始まったのである。

「**文化間で起こる現象**」。これが国際文化学のテーマとされている。文化と文化が交差する「とき、場所、機会」をとらえ、文化間の現象の解明に当たるといふ。これは国際文化学の研究対象として私たちが提示した「インターカルチュラリティ」という概念とまさに符合する。国際文化学とはその研究対象が何かという点に関する限り、その「誕生」から20年あまりを経て、ひとつの合意が成り立ちつつあるといえよう。今回の公開講座のテーマである、日本語という言語文化の発見も、アニメ・マンガのグローバル化も、フェアトレードの実践と定着も、柔道からJudoへの変貌も、いずれもこの意味で「インターカルチュラル」な現象である。私が担当した第1回目の講座の前半は、「文化を関係的、構造的、過程的にとらえる」という「インターカルチュラリティ」という概念の基本的な視点について、事例を交えつつ紹介した。

「**学際的**」。テーマへのアプローチが学際的であると述べられている。隣接諸学のディシプリンを組み合わせることで研究対象に向かうのである。「みつけて、つなぐ」という同書のサブタイト

ルには、学生一人一人がその方法と力を身につけることの大切さが含意されている。その通りであると思う。山口県立大学の特色ある「国際文化学入門書」の基盤には、「みつけて、つなぐ」力をつけるための教育課程の充実があることがうかがえる。

しかし、「学際的」であるとは、その分野に独自の方法や理論の確立がまだ不十分であることの婉曲でもある。実際それは否定できない。国際文化学に独自の理論や方法の構築はまだ始まったばかりである。そして、対象である「インターカルチュラル」な現象を解き明かすために、今日われわれが手にしている数少ない「ツール」のひとつが「文化触変(アカルチュレーション)論」である。私の担当講座の後半はこの理論の解説にあてた。

文化触変の過程は、文化が旧平衡から新平衡の状態にいたる一連のフローチャートで示される。講座ではその「流れ」に沿って、西洋文化とアフリカ文化の接触からゴスペルミュージックが生まれてくる過程、中国語あるいはフランス語との接触により変化したベトナム語の文字の歴史、フランス植民地アルジェリアでの文化接触、フェアトレード運動の日本への導入と広がり、アフリカにおける規範の崩壊と「子ども兵」の出現など、『国際文化学への第一歩』で取り上げられたいくつかのテーマを文化触変論の適用事例として取り上げた。

文化触変論は既知の事象についての「後付け」的な「記述の枠組み」にとどまるのではなく、さもなくばわからなかった事象の解明やあらたな問題領域の発見にもつながる潜在力を持っている。しかし当然のことながら限界や問題点も指摘されている。よくいわれるように理論とは現場に足を踏み入れるときの「地図」のようなものである。「文化の接触と変容の現場^{フィールド}へ」案内する時の「地図」が1枚だけでは心もとない。

学問の「いかがわしさ」を測るに4つの指標があるという。1つに、「名前が長い」こと。2つに、「新しい」こと。3つに、「学際的」であること。4つに、「カタカナ」がやたらに出てくること……。『国際文化学』はこの4つの条件に見事に適う。いかがわしさにあふれるこの「国際文化学」が100年後に残っているかどうか……。

「文・史・哲」(文学、史学、哲学)あるいはPPE(哲学、政治学、経済学)と称せられる「短くて、古い」伝統的な学問は、文学部、経済学部、政治学科、哲学科のような「器」がなくなっても残るであろう。比較的新しく「長い」けれど、文化人類学は残った。独自の知見、独自の手法、独自の理論を知の共同体にもたらし、他の研究領域に独自の貢献をなしたからである。

国際文化学が100年後に残っているかどうか。研究対象の自明性に安住するのではなく、まして、学部名、学科名に制度的、非学問的に依拠するのではなく、独自の理論の蓄積と方法の構築が始まるかどうか。国際文化学の将来を決する「第一歩」は、一にこの点にかかっているように思われる。

公開講座紹介

フェアトレードは世界を変えるか

下澤 嶽 (文化政策学部国際文化学科)

1. フェアトレードのはじまり

フェアトレードは開発途上国の生産者を不正な搾取から守り、公正な国際貿易のあり方を模索するための活動である。この活動は、途上国の女性の仕事づくりとして1940年代に欧米のNGOによって始められていった。この頃の活動は、ハンディクラフト・プロジェクト、オルタナティブ・トレードという名称で呼ばれていた。その後、歴史的に不平等な取引が顕著だったコーヒー、紅茶、カカオ、砂糖、バナナなどをフェアな取引システムで扱う商品をNGOが売り出し、こうした運動をフェアトレードという名称で表わすようになっていった。

こうした動きに大きなはずみをつけたのが、1997年に創設された「国際フェアトレード・ラベル機構」(略称FLO)だった。この団体により、フェアトレードの基準を満たすことを認証された商品は、認証ラベルを製品のパッケージに貼れるシステムが開発・提案されたのである。統一した認証ラベルの登場によって、ヨーロッパでは、2001年から2005年の5年間で販売額が年率20%の急成長をし、2008年には4270億円にまで成長しているという報告がある。現在では全欧の5万5千のスーパーマーケットでフェアトレード製品が買えるようになり、スイスでは全バナナの47%、生花の28%、砂糖の9%がフェアトレード・ラベルによって販売されるという事例も出てきている。最近はこうした領域へ、大企業が参入する傾向が見られている。



フェアトレード認証ラベル

2. 日本のフェアトレード

日本でも1970年代に支援プロジェクトのかたわら手工芸品を販売するNGOが現れ始める。そしてフェアトレード商品を専門に販売する団体が80年代後半から次々と設立されるようになり、フェアトレードへの関心が高まっていった。2000年以降フェアトレード・ラベルの普及がフェアトレードの再認識につながり、以前よりも活発にメディアでも取り上げられるようになり、一部企業もフェアトレード商品の開発に取り組むようになっていった。

しかし、日本の主なフェアトレード団体や企業は大都市に集中している。地方都市に住む市民は、そうしたフェアトレード団体のカタログやウェブサイトから商品を購入することはあっても、自分の住む地域で身近にフェアトレード活動やショップと接することは極めて少ない。こうした状況が、日本におけるフェアトレードの発展を抑える要因になっている。

長坂が2009年におこなった日本のフェアトレードに関する調査の中で、推定で806のフェアトレード・ショップが全国に存在すると報告している。

筆者は静岡県にあるフェアトレード・ショップの調査を2011年に実施した。その結果、静岡には38のフェアトレード・ショップが存在する可能性があることがわかった。今回の調査でアンケートの返答があったのは17団体。そのうち6団体を訪問調査した。

アンケートに応じてくれた17グループの状況を簡単にまとめると以下ようになる。

- ・年間の販売額が200万円未満というグループが12グループ、500万円以上1千万未満が3グループ、1千万以上が1グループだった。(1グループは無回答) 質問した金額の中間値で積算すると1グループ225万円程度で、フェアトレード研究委員会の平均額436万円よりもかなり低い状態である。おそらく規模の小さいグループが数多く回答したためと思われるが、それでもかなり低いことがわかる。
- ・助成金を活用しているグループは1団体だった。フェアトレード・グループにとって活用しやすい助成金制度がないことがよくわかる。
- ・ボランティア受入れをしているグループはひとつだけで、どこもボランティアを積極的に受け入れている状態ではない。これは、店頭販売作業は金銭がからむことと、商品説明や仕入れ作業が複雑で、ボランティアを受け入れる面倒さを考えてしまうためではないかと思われる。

調査からわかったことは多々あるが、一番重要なメッセージは、数少ない静岡のフェアトレード・ショップは、経営が非常に厳しく、短命であることだ。残念ながら地方都市では、フェアトレード・ショップが成長する基盤はまだ十分でなく、関心をもった市民もこうした場を知らず、団体の関係者も、県内の市民に活動の意義を伝えるような余裕がないことだ。

3. 地方都市のフェアトレード・ショップをどう育てるか

フェアトレードの認識をもっと広めるためには、可視化でき、双方向のコミュニケーションができる「人」や「場」の意義は重要である。そのためにもフェアトレード・ショップの存続や活動拡大は重要なテーマである。なによりも真っ先に解決しなければならないのは、ショップの経営改善である。そのためには以下のような改善提案が考えられるのではない。

- (1)地方都市のフェアトレード・ショップは、フェアトレードに限らず、エコで健康な商品、地元の障害者やお年寄りの商品、カフェの経営など、複合的にサービスを展開している。多様な商品やサービス展開をむしろ武器にした経営「フェアトレード・プラス」をもっと前面に出すべきである。
- (2)東京のフェアトレード輸入団体からの仕入れだけでなく、独自の仕入れ商品を増やすこと。
- (3)販売、イベントの補助を手伝ってくれるボランティアを経営戦略に組み入れることで、売上とコストを下げる工夫。

企業の参入により、フェアトレードの可能性は大きくなりつつある。しかし、ただ関心のある市民が商品の消費者となるだけでなく、公正な経済社会を考える運動を広げていくためには、地方都市のフェアトレード・ショップの存在は大きい。こうした問いに、今後どうこたえていくのが、フェアトレード関係者に問われている。

参考文献

長坂寿久 (編著) 2009『世界と日本のフェアトレード市場』明石書店
2006『欧州フェアトレード2005』報告書(要約)『季刊 国際貿易と投資』(国際貿易投資研究所) Summer 2006/No.64:89-108.

青銅の響き ——バリ島の四音音階のガムラン・アングルの世界

梅田英春（文化政策学部芸術文化学科）

2013年7月20日（土）、本学にて「青銅の響き——バリ島の四音音階のガムラン・アングルの世界」と題したワークショップと演奏会を開催しました。このイベントは、当大学の教員の監修の下、芸術文化学科の学生が運営の中心となる室内楽演奏会の一つとして実施されたものです。

ガムラン音楽はインドネシアの伝統的な青銅製打楽器のアンサンブルのことです。本学では今年度にバリ島の四音音階のガムラン・アングルを購入し、4月から授業に用いています。本公演は、そうした楽器を一般の方々にお披露目したいという目的と、浜松では鑑賞する機会の少ない音楽に触れてもらいたいという思いから、東京を中心に活躍するバリ島のガムランと舞踊のグループ「サリ・メカール」を迎えて実現したものです。さらに、これまでは「運営」という立場でのみ演奏会と関わってきた学生達が、プロの演奏者とともに舞台上に立つという初めての試みに挑戦した演奏会でもありました。

浜松は「音楽の街」として知られています。ピアノ、声楽などの国際コンクールが実施され、大小のホールでは多くの演奏会が催され、確かに「音楽の街」としての様相を呈していますが、その「音楽」は、西洋芸術音楽が中心です。しかし「音楽」とは本来、西洋芸術音楽を指しているわけではありません。多文化共生を目指す浜松では、その音楽文化もまた、西洋芸術音楽に限らず、世界音楽と共生していかなければならないでしょう。

今回のイベントでは、演奏会とは別にワークショップを開催しました。これは、音楽や芸能を「観る」、「聴く」だけでなく、演奏を通して触れていただきたいという思いから実施したものです。小学生対象と中学生以上のクラスを準備した結果、中学生以上のワークショップは、定員20名の一回では収まらず、数を増やして実施をするほどの盛況ぶりでした。演奏会も同様に定員を100名として、バリ島で上演されているような雰囲気を出すために、あえて講堂で行わずに観客が音楽を身近に感じられる広さの会場で行いましたが、広報を始めて数日で定員に達するなど、一般の人々の東南アジアの音楽への関心の高さに驚かされました。

大学では、これまでも数多くの演奏会を開催してきましたが、今回、初めて行なった試みとして、学生たちが運営にとどまらずにワークショップの指導補佐をし、プロの演奏家とともに実際に舞台上に立って演奏したという点があげられます。

芸術文化学科は、芸術の実践を目指す学科ではなく、芸術をマネジメントする人材を育成する学科であることから、これ

までは運営面だけに学生が参画してきました。しかし舞台上に立つ経験、音楽を実践する体験は舞台上立つアーティストを理解する上で大切なことです。また現在、国内で行われている演奏会では、企画・運営者側と上演者が明確に分かれて行われているばかりでなく、演奏者が自ら企画して準備段階までこなし、当日運営だけを第三者に依頼する演奏会が数多いことも無視できない事実です。学生達がそうした演奏会の形態を実際に体験することも重要なのです。今回、舞台上立った学生たちの数人は演奏するだけでなく、出演者との交渉から広報活動など演奏会の様々な準備を実際に行いました。また演奏者となる当日は舞台運営に関われないことから、教員のサポートのもと、詳細な運営マニュアルの作成や当日スタッフとの徹底したミーティングなどを通して、これまでになかった方法で当日運営が行われました。

本学には、毎年秋の恒例行事となっている薪能があり、一般の方々に向けて日本の伝統芸能を発信しています。インドネシアのガムラン音楽の学内での活動はまだ始まったばかりですが、大学が楽器を所有している以上、そうした楽器を有効に利用して大学の研究教育に用いるだけでなく、社会貢献として外向けに発信していくことは大学の使命です。今後とも本学からインドネシアの音楽文化を発信していきますが、それにとどまらず、世界各地の音楽を大学にしかできない方法で発信し、浜松が「世界音楽の街」となるようなさまざまな試みを新たに企画していきたいと考えています。



プロのガムラン奏者とともに演奏する学生たち

活動紹介

第4回県民オペラ「夕鶴」1400人を魅了!

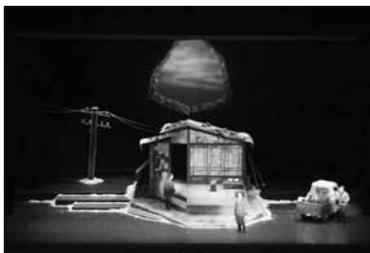
静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

3月10日(日)アクトシティ浜松大ホールで、県民オペラ「夕鶴」が上演されました。4回目となった今回は演目を新たに、日本オペラの上演となりました。「鶴の恩返し」で知られるこの物語は、だれもが知っている内容であり、着物姿の登場人物を想像したことでしょう。

しかし、幕が上がると目に飛び込んできたものは、与ひょうの運転するオート三輪。会場がいきなり昭和の時代へとタイムスリップしました。



この新しい「夕鶴」を演出したのは、第1回・第2回とも県民オペラの演出を手掛けた中村敬一氏。團伊玖磨氏の強い思いによってこの名作オペラが誕生した時代へと、観客をいざないました。



大きな真っ黒い壁が崩れ落ちた上に立つ与ひょうの家。そしてその向こうに広がる美しい夕焼け空。

シンプルながら、戦後の復興とその瓦解とを象徴するセットに、美しく繊細な照明が絡み、物語を進めていきます。

子供たちは、生き生きとした表情と、のびやかな歌声で無垢な心を伝えます。



↑夕鶴児童合唱団 (オーディションで選ばれた県内の小中学生15名)



反対に運ずと惣どは欲望に渦巻く世界へと与ひょうを誘惑します。



つうが歌う名アリア「与ひょう、わたしの大事な与ひょう」は、メロディアスな調べがしみじみと響き渡り、聴く人の心を強くゆさぶりました。

また、静岡県ゆかりのソリストたちの熱演も、高い評価をいただきました。



↑
右) 運ず:高田智士(富士市出身)
左) 惣ど:加藤宏隆(袋井市出身)

↑
つう:光岡暁恵(第5回コンクール第1位&三浦環特別賞受賞)
与ひょう:水船桂太郎(浜松市出身)



会場ロビーには、国立音楽大学附属図書館からお借りした貴重な台本やポスター、プログラム等を展示しました。

本学学生も公演の成功に向け、力を貸してくれました。



上)稽古ボランティア
左)影アナウンス&レセプション司会

○特別公開講座 薪能

第一夜 10月8日(火) 18時30分開演 静岡文化芸術大学講堂
 第一部 座談会「能楽になった葵上」(梅若猶彦ほか)
 第二部 講演「能に学ぶ、世界との和解の手法～現代演劇の視点から」(宮城聰・静岡県舞台芸術センター芸術総監督)

第二夜 10月9日(水) 18時30分開演 静岡文化芸術大学講堂
 現代劇「喫茶店」(作・演出/梅若猶彦 出演/薪能プロジェクトチームスタッフ)

第三夜 10月10日(木) 18時開演 静岡文化芸術大学 出合いの広場(雨天時は講堂)
 狂言・仕舞・一調・能「葵上」

受講料 一般3,000円(全席自由・全三夜通し券のみ)
 チケットのお求めは①チケットぴあ(Pコード:430-945)
 (全国のチケットぴあのお店、サークルK・サンクス、セブンイレブンにて)
 ②アクトシティチケットセンター

お問合せ:薪能プロジェクトチーム 053-457-6230
 企画室 053-457-6113

○SUAC 多文化プロジェクト

<展示イベント>「届け!お芝居デリバリーと私たちの想い」
 10月11日(金)～10月20日(日) 11時～19時 静岡文化芸術大学西ギャラリー
 ※10月12日(土) 12時30分頃より展示会場前にてギャラリートークおよび多言語によるお芝居会を開催予定

<特別講演会>深沢正雪(ニッケイ新聞編集長)「ブラジルの日本語メディアから見た日系人社会」
 10月11日(金) 15時～17時 南281中講義室
 ※13時より同会場にてドキュメンタリー映画「闇の一日」を上映

<シンポジウム>「文化をつなぐ橋づくり～学生による実践の試み～」
 10月12日(土) 9時30分～12時 南278大講義室
 参加無料・申込不要
 お問合せ:池上重弘研究室 053-457-6156

○バンバン!ケンバン はままつ

10月26日(土) 静岡文化芸術大学

①コンサート 大友剛(鍵盤ハーモニカ) 13時開演	②講演 小岩信治	14時開演
③お話と演奏 須藤英子(ミニピアノ) 15時開演	④コンサート かとうかなこ(電子アコーディオン)	16時開演

会場は①②④が自由創造工房 ③が総合演習室
 チケット情報 ①及び④は有料 一公演につき 一般800円 学生500円 親子500円 中学生以下無料
 お求めはアクトシティチケットセンターにて
 ②及び③は入場無料

お問合せ:文化・芸術研究センター 053-457-6105

○文化・芸術研究センター特別連続講義「オペラを観てみよう」

11月25日(月) 18時～21時「モーツァルトのオペラを観てみよう」(フィガロの結婚)
 12月17日(火) 16時30分～21時「ワーグナーのオペラを観てみよう」(トリスタンとイゾルデ)
 講師:三枝成彰(文化・芸術研究センター長) 会場 南280中講義室
 受講料無料・申込不要
 お問合せ:文化・芸術研究センター 053-457-6105

○相曾賢一郎ヴァイオリン・リサイタル

11月26日(火) 18時30分開演 静岡文化芸術大学講堂
 チケット(全席自由) 一般3,000円 学生2,000円 中学生以下無料
 ※チケットのお求めは アクトシティチケットセンター まで
 お問合せ:文化・芸術研究センター 053-457-6105

○静岡国際オペラコンクールセミナー オペラおもしろ講座

「オペラって何だろう? ～誕生から現在まで～」
 ナビゲーター 木村俊光(第7回静岡国際オペラコンクール審査委員長)
 浜松(静岡文化芸術大学講堂) 12月8日(日) 14時開演
 静岡(しずぎんホールユーフォニア) 12月15日(日) 14時開演
 沼津(沼津市民文化センター小ホール) 12月22日(日) 14時開演
 入場無料・要受講申込
 (応募受付は10月1日より 応募方法は静岡国際オペラコンクールのHP等でご確認ください)
 お問合せ:静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局 053-457-6446

編集後記

このニュースレターの編集者として毎回(密かに)楽しみにしているのが「巻頭寄稿」。今号ではデザイン学部長の海野先生に「建築と文化～建築は「凍れる音楽」か?～」というタイトルでご寄稿頂きました。他のページは大抵こちらで決めたテーマに沿って原稿を執筆頂くのですが、「巻頭」についてこちらで決めるのは執筆者のみ。依頼の際も字数以外の制限はなく、「タイトル、内容はお任せ」ということでお願いしています。寄稿者は日頃、専門家・研究者として様々な原稿を書かれている方々ばかりですので、毎回快く引き受けて頂けるのですが、「タイトル・内容自由」の原稿をしたためていく作業プロセスは一体どのようなものなのか、一度別席で「執筆裏話」や「込められた思い」などじっくり伺いたい、と常日頃思っているところです。(St.)

Art & Culture

文化・芸術
 文化・芸術研究センター
 ニュースレター
 Vol.18

September, 2013

発行人:三枝成彰 編集人:富田晋司
 発行:静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 (事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

